

難波西鶴と海之道

【1】

森田 雅也

「存じのように西鶴といえ
ば、江戸時代の大阪を代表す
る作家です。時は17世紀後半。
阿茶びび立たずと申します
が、西鶴が大坂で活躍してい
た時期、芭蕉はすつと江戸を
拠点としていました。ちなみ
に西鶴と芭蕉は一つ違い。享
年まで一つ違いと面白い人
です。」

芭蕉の辞世の句「旅に病で
夢は枯野をかけ廻る」はあま
りに有名で、その句調が南御
堂にあることから、芭蕉と天
阪が随分深いと思っっている
方がおられますが、西鶴の比
ではありませんでした。

ところで西鶴の方も、「好色
一代男」「日本水代蔵」「世間胸
算用」など、浮世草子という当
時の小説の作家として知られ

ていますが、散文作家として
活躍したのは晩年のほんの十
数年。その生涯の多くは俳諧

師として活躍しました。
西鶴は、大阪大藏宮の連歌
所宗匠、西山宗因に師事し、
その俳諧の門流、談林俳諧の
旗手として活躍し、特に一人
で多くの句を作り続ける矢数
の俳諧の名手として知られてい
きます。
住吉神社では一昼夜で2万
3500句も詠んでしまいま
るまで一世を風靡しました。



西鶴自筆の「好色一代男」最終話の挿絵

西鶴は「海之道」で旅?

諸国ばなしの取材経路解き明かす

芭蕉も一時、桃青と名乗っ
ていたころは江戸の談林派の
一人でした。では、西鶴と芭
蕉は同門。直接会ったことが
あるのでしょうか。芭蕉は西
鶴の宗匠師匠とは句会に同座
してはいるのですが、西鶴との
同座はないようなのです。こ
の謎は平将門と藤原純友が会
ったことがあるのかというの
と同様の難しい課題なので
す。

さて、芭蕉と言えば「奥の
細道」。関東、奥羽、北陸な
ど全行程約6百里(2千4百
+4)を踏破したことは、こ
れも驚きです。

芭蕉はほかにも多くの紀行
文があり、生涯実によく歩い
ています。優れた詩人とは、
芭蕉があげる西行、宗祇など
のように旅を住み処とするも
のなのでしょうね。それでは
西鶴の場合はどうなのでしょう
か。

あまり西鶴と旅について問
題視したり、研究した先人は
いないようです。西鶴は「西
鶴諸国ばなし」の序で「世間
一廻り」を記述しています。

あまり西鶴と旅について問
題視したり、研究した先人は
いないようです。西鶴は「西
鶴諸国ばなし」の序で「世間
一廻り」を記述しています。

森田 雅也(もした、まさや)
関西学院大学文学部文学言語学専攻教授、博士(文学)。日
本近世文学会常任委員、俳文学会委員、日本文学学会常任理
事など。著書「西鶴浮世草子の展開」(和泉書院)、編著「西
鶴諸国ばなし」(同)、分担執筆「新編西鶴全集第三期・第IV
期」(鶴城出版)等多数。昨年より西鶴実行委員会代表。

ここに挙げた「好色一代男」
の挿絵を「驚くべき」。西鶴
自筆のこの挿絵は最終話のも
のです。世之介が日本の女た
ちに飽きて60歳にして女護が
鳥を自指して旅立っていくシ
ーンです。とてもうまく船を
描いていますね。

西鶴と船、西鶴と海。この
シリーズは、芭蕉が「陸之道」
を歩いて作品を書いたよう
に、西鶴は「海之道」を取材
経路として持っていたのでは
ないか。こんな仮定を一回
一廻りさへしていくという
企画です。江戸時代の北前船
に乗ったような心持ちで楽し
んでお読みください。